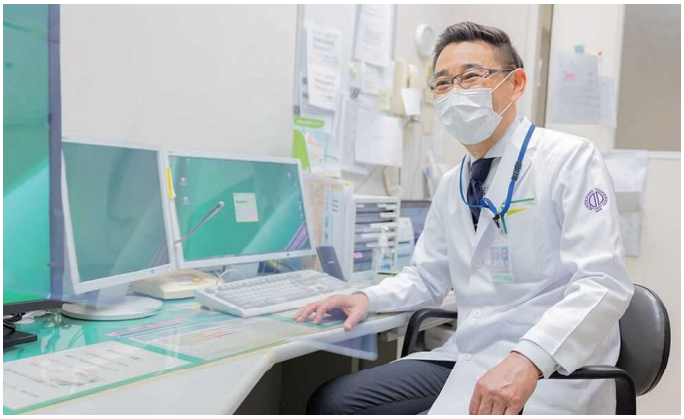
静岡県で活躍する医師



順天堂大学医学部附属静岡病院

教授／消化器内科

玄田 拓哉 医師

医師をこころざしたきっかけを教えてください。

玄田医師　高校生の時に理系クラスを選択しましたが、その後物理、化学、数学などのいわゆる理系科目が苦手で、どちらかというと英語、国語などの文系科目が得意なことを自覚しました。このため、大学進学を考えたときに物質や数字を扱うのではなく、できるだけ人と関わる仕事がしたいと考えて医学部を選びました。

現在の診療科を専攻したきっかけと魅力を教えてください。

玄田医師　当時は大学を卒業するとき専攻する診療科を選びましたが、この時はあまり決め手がなく漠然と内科を希望しました。しかし、その後の内科研修で、消化器内科は関連する臓器が食道、胃、腸、肝臓、膵臓、胆道など多岐にわたっている事や、内科の中でも内視鏡検査などの手技が多く「手に職をつける」という側面がある事を知り魅力を感じました。また、内科研修医として赴任した新潟県の県立病院で尊敬できる消化器内科の先生方に出会い、「自分の手（手技）で治療する」ダイナミックな消化器内科臨床の最前線を経験させていただいた事が決め手になりました。

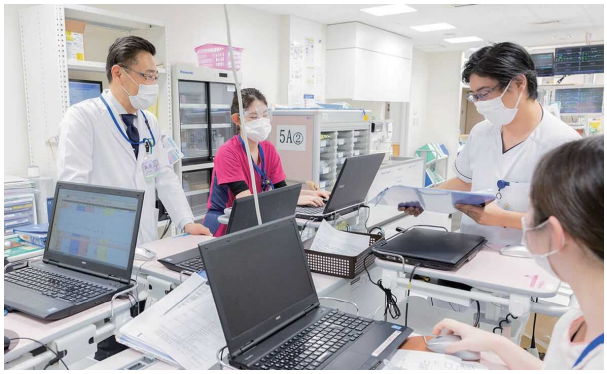
大学院では肝臓がんの基礎研究を行ったため、現在では消化器の中でも特に肝臓疾患を専門としています。私が医師になった 1990 年代から 2000 年代は、当時「第二の国民病」と呼ばれていた C 型ウイルス性肝炎から発癌した肝臓がんの患者数がピークを迎えており、肝臓の画像診断やカテーテル治療、エコー下穿刺治療が大きな進歩をした時代でした。この時代に内科医としてウイルス性肝炎の治療から肝不全の管理、肝臓がんの画像診断、カテーテル治療・穿刺治療などの治療まで幅広く携わる仕事ができたことは自分自身の大きな財産になっています。また、自分が大学を卒業する時期に発見された C 型肝炎ウイルスは薬物の進歩により現在では撲滅が間近になっており、一つの疾患の発見から撲滅までを見るという医師として得難い経験をすることができました。

現在のご勤務先での現況について（印象や取組まれていること等）教えてください。

玄田医師　現在勤務している病院は静岡県肝疾患診療連携拠点病院に指定されているため、様々な肝疾患の患者さんを診療するだけでなく、県のウイルス性肝炎対策の行政政策にも関わっています。また、大学附属の教育病院でもある事から、若い先生方の専門医取得や学位取得に貢献できるように質の高い医療データを蓄積し学会発表や論文発表を通して第３者からの客観的評価を受けるように心がけています。

若手医師との関わりや指導について教えてください。

玄田医師　現在、医学部を卒業すると専攻を決める前に 2 年間の臨床研修が必須になっています。このため、我々の時代と比較すると消化器内科専門の修練を始める時期が遅くなっています。消化器内科は内視鏡検査や超音波検査など必要とされる手技が多い科なので、専攻を決めたらできるだけ早く、たくさんの検査・治療手技に携われるように心がけています。また、消化器内科で必要とされる手技は、決して手先の器用さだけでできるものではなく、人体の解剖や生理、そして疾患の知識があって初めて成り立つものであることを重視して指導しています。



医師を目指す方や若手医師にメッセージをお願いします。

玄田医師　医師は病気に悩む人を治す、人の命を救うという非常にやりがいのある仕事です。ただし、大学を卒業して医師免許を取得すれば良い医療ができるわけではありません。日々の臨床経験を蓄積し、日進月歩の医学的知識を常にアップデートすることが求められます。そのような意味で、医師を辞めるまでは修練と勉強が続く仕事です。医師になった後も現状に満足するのではなく、常に医師としての「腕を磨く」事を忘れないでほしいと思います。

プロフィール

玄田 拓哉 医師

趣味

・スポーツジムでのトレーニング

1993年3月　新潟大学医学部卒業
1993年5月　新潟大学医学部附属病院内科研修医
1994年5月　新潟県立吉田病院内科研修医
1995年5月　厚生連村上総合病院内科医師
1996年5月　国立がんセンター研究所病理部研修生
1997年4月　がん研究振興財団リサーチレジデント
2000年3月　新潟大学大学院医学研究科卒業
2000年4月　新潟大学医学部第３内科医員
2004年5月　新潟県立新発田病院内科医長
2007年4月　順天堂大学医学部附属静岡病院消化器内科　准教授
2015年1月　同　先任准教授
2018年4月　同　教授